



TITLE:

# 非定常ストークス方程式の解 (流体力学における非定常問題)

AUTHOR(S):

橋本, 英典

---

CITATION:

橋本, 英典. 非定常ストークス方程式の解 (流体力学における非定常問題). 数理解析研究所講究録 1980, 393: 1-9

ISSUE DATE:

1980-08

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/104978>

RIGHT:

## 非定常ストークス方程式の解

東大 理学部 橋本 英典

## § 1. はじめに

ナビエ・ストークスの方程式の慣性項の  $\partial \mathbf{V} / \partial t + (\mathbf{V} \cdot \nabla) \mathbf{V}$  を  $\partial \mathbf{V} / \partial t$  で置きかえた非定常ストークス方程式は i) レイノルズ数が小さい ( $\rho \sigma L / \mu \ll 1$ ) とすばかりでなく ii) 流れの変動時間  $1/\omega$  が通過時間  $L/U$  に比べて短かいとき ( $\omega L \gg U$ ) にも有効である。ただし  $L$  は代表長,  $U$  は代表流速,  $\rho$  は流体の密度,  $\mu$  は粘性率である。また解の存在, 唯一性の議論 両方にも重要な役割を演ずる。

ここでは方程式の線型性にもとづき, まず固定点に置かれた  $F e^{i\omega t}$  の強さの集物源に対する基本解を導き, その重ね合わせにより一般解を構成する。また非定常性にかかれた物体に依るかと, その物体によっていかにこじれが場を遠くびうする間に簡単な関係がありことを示す。また強さが任意の時間変化をし, 任意の

運動を行なう集中力源に対する2解を合わせること  
 構成し、運動速度が一定値に近づくときそれがオセーンの  
 方程式の基本解（オセーンレット）を与えることを示す。

§ 2. 集中力  $F_p e^{\alpha t} \delta(x-x_p)$  に対する基本解<sup>1)</sup>

点  $x_p$  に集中力  $F_p e^{\alpha t} \delta(x-x_p)$  が働くときの基本解  
 は関数  $e^{\alpha t}$  を除く

$$\nabla \cdot V = 0, \quad (1)$$

$$\rho \alpha V = \mu \Delta V - \nabla p + F_p \delta(x-x_p), \quad (2)$$

あるいは

$$\Delta_E[\mu V] \equiv (\Delta - k^2)[\mu V] = \nabla p - F_p \delta_p \quad (2')$$

を満足する。ここで  $k^2 = \rho \alpha / \mu$  ( $\text{Re } k > 0$ ),  $\delta_p = \delta(x-x_p)$  (3)

(2) の  $\text{div}$  をとれば、(1) により

$$\Delta p = (F_p \cdot \nabla) \delta(x-x_p)$$

であるから、圧力  $p$  はラプラスの方程式の基本解

$$\phi_p = \begin{cases} -1/(4\pi r); \dots (3\text{-次元}), \\ \frac{1}{2\pi} \log r; \dots (2\text{-次元}), \end{cases} \quad r = |x-x_p|, \quad (4)$$

を用いて力の方向に軸をとって2次元を出し

$$\phi_p = (F_p \cdot \nabla) \phi_p \quad (5)$$

の形に表わすことが出来る。これを (2') に代入し、ヘルムホルツ方程式の基本解 ( $\Delta \chi_p = \delta(\mathbf{r} - \mathbf{r}_p)$ )

$$\chi_p = \begin{cases} -e^{-k_0 r}/(4\pi r) & (3\text{-次元}), \\ -\frac{1}{2\pi} K_0(k_0 r) & (2\text{-次元}), \end{cases} \quad (6)$$

(ただし  $k_0$  は第2種の変形ベッセル函数) を用いれば  
速度  $\mathbf{V}$  に対し

$$\begin{aligned} \mu \mathbf{V}_p &= -\frac{1}{k^2} (\mathbf{F}_p \cdot \nabla) \nabla (\phi_p - \chi_p) - \mathbf{F}_p \chi_p \\ &= \frac{1}{k^2} [-\nabla p_p + \text{rot rot}(\mathbf{F} \chi_p)] \quad (7) \end{aligned}$$

が得られる。

(7) の第1項は渦度 ( $\nabla \phi_p$  は圧力に関係し、 $\mathbf{F}_p \chi_p$  の項は

$$\mu \boldsymbol{\omega}_p = \text{rot}(\mu \mathbf{V}_p) = \mathbf{F}_p \times \text{grad} \chi_p \quad (8)$$

が示すように 渦度  $\boldsymbol{\omega}_p$  を与え、純非定常 ( $k \neq 0$ ) であり限り遠く ( $k r \rightarrow \infty$ ) 指数関数的に小さくなる。遠方場が渦度と一致することを示す。

任意の流れの中に置かれた物体による擾乱場は流体に  $\mathbf{F}_p$  の力を受ける基本解の重畳 ( $\mathbf{F}_p$  の種々の値に対して) により表わされ、(ストークス近似の成立の領域で) 遠方場を与えるのは  $\chi_p$  の重畳によるもので、指数関数的に小さく (非定常境界層の外)、物体の中心を原点と

37

2重放射出しのポテンシャル場

$$V = \nabla \left( -\frac{1}{\mu k^2} p \right), \quad p = (\mathbf{F} \cdot \nabla) \phi. \quad (9)$$

に近づく。ここに  $\mathbf{F}$  は  $\mathbf{F}_p$  の総和であつて、固定した物体に流体が及ぼす力  $-\mathbf{F}$  の反作用である。こゝに、静止物体に働く力が2重放射出しの形に与えられ、圧力場（遷移速度場）の係数からただちにみわたされることは、 $\phi$  につゝフーリエ合成を行ふ、とてかゝる一般化的な性質であることは明らかである。

以上では物体が静止してゐるものとして、物体運動中の物体が  $V_0 e^{at}$  の速度で運動するとき、物体に固定した加速座標系をとればよい。  $\sim V_0 e^{at}$  の加速度をよめる一様反力場における浮力  $\sim \rho V_0 e^{at}$  が物体に働く力につけ加わることがわかる。

また  $e^{at}$  を分離した一般解は (15), (17) を流れの外側（あるいは物体内）に分布せしめ得るものがあり、これを含ませる結果は、一般解として

$$\begin{aligned} \mu V &= -\frac{1}{k^2} (\nabla p + \text{rot rot } \Phi) \\ &= \Phi - \frac{1}{k^2} \nabla (p + \text{div } \Phi) \end{aligned} \quad (10)$$

と与へる。ただし  $p$  は調和関数

$$\Delta p = 0 \quad (11)$$

$\Psi$  は ヘルムホルツ の 方程式

$$\nabla^2 [\Psi] = (\Delta - k^2) \Psi \quad (12)$$

を満足するベクトル関数である。

例。固定球 (半径  $a$ ) を過す振動流  $V_\infty (\propto e^{at})$

球面上で  $V = -V_\infty$ , 無限遠で 0 に近づく場合  
 $e^{at}$  を除く定数に

$$p = (\nabla \cdot \nabla) \phi, \quad \frac{F}{6\pi\mu a} = -E V_\infty \quad (13)$$

$$E = 1 + ka + \frac{1}{3} k^2 a^2$$

$$\Psi = -\frac{3\mu a}{2\eta} e^{k(a-r)} \quad (14)$$

で与えられる。  $-F$  は 流体が球に及ぼす力である。

$E$  の第 3 項は  $F$  に  $-2\pi\rho a^3 \dot{V}_\infty$  を与える (17 時間微分)

さらに  $\frac{4\pi}{3} \rho a^3 \dot{V}_\infty$  を加えれば 静止流体中を  $V_\infty$  が流れる速度で

振動する球に働く抵抗  $-6\pi\mu a \tilde{E} V_\infty$ ,  $\tilde{E} = E - \frac{2}{9} k^2 a^2$

を与える。一般に  $V_\infty (e^{at})$  の流れの中で  $V_0 (e^{at})$

の速度で振動する球には  $6\pi\mu a E (V_\infty - V_0) + \frac{4\pi\rho a^3}{3} \dot{V}_0$

の力<sup>2)</sup>が働くことも容易にわかる。任意の運動についてはフーリエ合成から

ここでも一般解を用いると  $V_\infty$  が場所により場合につ

いて、流体に働く力を  $V_\infty(x)$  あるいは  $p_\infty(x)$  を用いる

ことができる (Faxén の公式の拡張) こともできる。(次の機会に別)。

§ 3 瞬間集中力による基本解<sup>1)</sup>

時刻  $t = \tau$  における瞬間集中力  $F(\tau) \delta(t - \tau) \delta(x - x_p)$  に対する基本解  $V_c(x, t)$ ,  $p_c(x, t)$  は

$$\nabla \cdot V_c = 0 \quad (1)$$

$$\rho \frac{\partial V_c}{\partial t} = \mu \Delta V_c - \text{grad } p_c + F(\tau) \delta(t - \tau) \delta(x - x_p) \quad (2)$$

から見ておくれ。

ラプラス変換  $f^* = \mathcal{L}[f] = \int_0^\infty e^{-\alpha t} f(t) dt$  ( $\tau > 0$ )  
 を行なえば (2.1), (2.2) で  $V, p$  のかわりに  $V_c^*, p_c^*$   
 $F_p$  のかわりに  $F(\tau) e^{-\alpha \tau}$  とおいたものが得られよう。  
 したがって

$$p_c^* = (F_p \cdot \nabla) \phi_p e^{-\alpha \tau} \quad (3)$$

$$\mu V_c^* = \left[ -\frac{1}{k^2} (F_p \cdot \nabla) \nabla (\phi_p - \chi_p) - F_p \chi_p \right] e^{-\alpha \tau} \quad (4)$$

と書ける。  $k^2 = \rho \omega / \mu = \alpha / \nu$  ( $\nu = \mu / \rho$  は動粘度)。

ラプラス逆変換の公式 (Erdélyi<sup>3)</sup> p. 245, 283)

$$\mathcal{L}^{-1}[f^*(\alpha) e^{-\alpha \tau}] = f(t - \tau) \quad t > \tau$$

$$\mathcal{L}^{-1}[\exp(-\alpha^{\frac{1}{2}} \alpha^{\frac{1}{2}})] = \frac{1}{2} \alpha^{\frac{1}{2}} \pi^{-\frac{1}{2}} t^{-\frac{3}{2}} \exp(-\frac{\alpha}{4t})$$

$$\mathcal{L}^{-1}[\alpha^{-1} \exp(-\alpha^{\frac{1}{2}} \alpha^{\frac{1}{2}})] = \text{erfc}(\frac{1}{2} \alpha^{\frac{1}{2}} t^{-\frac{1}{2}}), \quad (5)$$

$$\mathcal{L}^{-1}[K_0(\alpha^{\frac{1}{2}} \alpha^{\frac{1}{2}})] = \frac{1}{2t} \exp(-\frac{\alpha}{4t})$$

$\text{erfc}(\xi) = 1 - \text{erf}(\xi) = \frac{2}{\sqrt{\pi}} \int_{\xi}^{\infty} e^{-\xi^2} d\xi$

$$\mathcal{L}^{-1}[\alpha^{-1} K_0(\alpha^{\frac{1}{2}} \alpha^{\frac{1}{2}})] = \frac{1}{2} E(\frac{\alpha}{4t}), \quad E(\xi) = \int_{\xi}^{\infty} e^{-\xi^2} d\xi$$

$$\text{ただし } \alpha = |\mathbf{x} - \mathbf{x}_p|^2 / \nu = R / \nu^2, \quad R = |\mathbf{x} - \mathbf{x}_p|$$

を用いるれば

$$P_c = (F(\tau) \cdot \nabla) \phi_p \delta(t - \tau), \quad \phi_p = -\frac{1}{4\pi R}$$

$$\rho V_c = F(\tau) [4\pi\nu(t - \tau)]^{-N/2} \exp\left[-\frac{R^2}{4\nu(t - \tau)}\right] - (F(\tau) \cdot \nabla) \nabla \bar{\Psi}_c$$

を得る。ただし  $N$  は次元数

(6)

$$\bar{\Psi}_c = \begin{cases} -\frac{1}{4\pi R} \operatorname{erf}\left(\frac{R}{2\sqrt{\nu(t - \tau)}}\right), & : N = 3 \\ \frac{1}{4\pi} \left[ E\left(\frac{R^2}{4\nu(t - \tau)}\right) + 2 \log R \right], & : N = 2 \end{cases} \quad (7)$$

である。

2次元の流れでは複素量  $z = x + iy$ ,  $\bar{z} = x - iy$ ,

$\bar{z} = F_x + iF_y$ ,  $\zeta = z - z_p(\tau)$  を導入するこゝによつて

複素速度  $w = v_x - i v_y$  を用いるのが便利である。(6), (7)

から  $2\pi\rho w_c$  に就して

$$2\pi\rho w_c = \frac{\bar{z}}{\zeta^2} + \left\{ -\frac{\bar{z}}{\zeta^2} + \frac{\bar{z}}{4\nu(t - \tau)} \left(1 - \frac{\bar{\zeta}}{\zeta}\right) \right\} \exp\left[-\frac{\zeta\bar{\zeta}}{4\nu(t - \tau)}\right]$$

が導かれる。

(8)

#### §4 移動する非定常集中力による場

時刻  $t$  に  $\mathbf{x}_p(t)$  にあり  $F(t)$  の強さをもつ非定常集中力

$F(t) \delta(\mathbf{x} - \mathbf{x}_p(t))$  の生じる場合は §3 で求めた  $F(\tau) \delta(\mathbf{x} - \mathbf{x}_p(\tau))$

$\delta(t - \tau)$  による場  $V_c, P_c$  がある。これは  $w_c$  を物体が静止して、

無限の過去から現在の時刻  $t = t_0$  まで  $\tau$  について積分



が求められる。ただし  $x_p$  は  $x_p(t)$  であることを留意する。

したがって

$$pV = \int_{-\infty}^t pV_\tau d\tau, \quad p = \int_{-\infty}^t p_\tau d\tau = (F(t) \cdot \nabla) \phi_p, \quad 2\pi p\omega = \int_{-\infty}^t 2\pi p_\tau \omega_\tau d\tau,$$

$$\text{ただし} \quad \phi_p = -1/(4\pi |x - x_p(t)|). \quad (1)$$

したがって、圧力はその瞬間の源の位置と流線によつて定まるものがあり、(2.1), (2.2) に相当して

$$\Delta p = F(t) \delta(x - x_p(t)) \quad (2)$$

から直接導くこともできる。

物体の速度が  $x$  軸の負の方向に一定値  $U$  ( $x_p = -Ut$ ) に、 $F$  が一定値  $F$  に漸近する（あるいは原点  $x_p(t)$  に移り、極限をとる）ことにより、

$$pU = \frac{F}{4\pi R} e^{-\kappa(2-x)} + \frac{1}{4\pi} (F \cdot \nabla) \nabla [\log(2-x) - E(\kappa(2-x))],$$

$$4\pi pU = -\frac{\gamma}{z} + \kappa e^{\kappa x} [\gamma K_0(\kappa z) + \gamma K_1(\kappa z) \bar{z}/z], \quad \begin{matrix} : N=3 \\ (3) \end{matrix}$$

$$\kappa = U/(2v) \quad : N=2$$

がえられる。これは  $x$  方向に一定の定常流  $U$  があるとき、原点にゐた定常集中力に対するオセーニの方程式（ナビエ-ストークス方程式の慣性項を  $U \partial/\partial x$  で置きかえたもの）の<sup>1,4)</sup> 基本解に他ならない。このように非定常ストークス方程式がオセーニの方程式を特別に含むことは、ガリレイ変換により示すことも可能である。

## 文 献

- 1) Hasimoto, H: Theor. and Appl. Mech. (Tokyo Univ. Press)  
22 (1972) 287.
- 2) Lamb, H: Hydrodynamics (Cambridge at the Univ.  
press, 6th ed. 1932),
- 3) Erdelyi, A: et al: Tables of Integral Transforms I. (Mc  
Graw-Hill, 1954).
- 4) 今井 功: 流体力学 前編 (裳華房, 1973).